

国際理解と平和Ⅰ ～あなたにとって平和とは～

杉本雅子・飯島幸久
中野和之・鈴木克彦
山崎辰雄

【抄録】 生徒は中1「生き方を探る」、中2「生命と環境」で総合学習を経験し、テーマの絞り方、フィールドワークの方法、記録の取り方、発表の方法などのスキルを身につけている。中学3年ではそれらのスキルを生かし、「国際理解と平和Ⅰ」という学年テーマをグループで追究する。グループ学習をするのは、平和を考える時に意見の対立を乗り越えるための話し合いが不可欠だと考えるからである。前期には身近な人の戦争体験について聞き取り調査をし、後期には広島・大久野島での広島研究旅行を通して戦争について被害と加害の視点からとらえることを目指した。そして、その研究成果をふまえて、自分たちは日々の生活の中で何ができるか、何をしなければならないのか。戦後58年、日本においては戦争の痕跡が消えつつある現在、戦争を経験された方々に気持ちを沿わせてその事実を知り、一人一人が「あなたにとって平和とは」と問いかけながら、グループで平和について、また被害と加害について学んだ。

【キーワード】 平和 戦争 原爆 広島 大久野島 グループ学習 スキル

I. 学年テーマと目標

中学3年では「国際理解と平和Ⅰ」を学ぶ。この学習は今までの中1で「生き方」、中2で「生命と環境」という、個人の興味関心から選んだテーマを、自分で掘り下げていくという方法とは異なっている。「国際理解」「平和(戦争)」という他者との関係を抜きにしては考えられないテーマを、グループ学習という方法で深めていくためである。

本年度の学習を進めるにあたって目標としたことは、「他者の心情に共感すること」「自分の主体性を保ち、他と協力して作業を進めること」である。そのための三本の柱を、「実際に戦争を体験された方のお話を聞く」、「広島研究旅行を通して日本の戦時中の被害と加害の事実を知る」、「グループ学習によって他者と協働してテーマを追求する」こととした。

そして、「一年の終わりには自分の言葉で、戦争の事実と、平和についての考えを相手の立場をふまえて述べられるようにする」ことを目標に、学習を開始した。

II. 学習の経過

一年間の学習を三つの時期に分けた。

最初は「戦争について学ぶ」(第1回～第6回)である。生徒には共通となる知識があるわけではない。兵器やテロに関心を持ち、細かいところまでマニアックに知っている生徒もいれば、戦争のない日本社会で生活しているのぼんやりとした知識しか持たない生徒もいる。そこで、この時期には戦争の実相を知り、戦争を直接体験した方の心情に触れることを目的とした。

次は「広島研究旅行に向けての事前学習」(第7回～第12回)である。研究班に分かれ、各班のテーマを決め、実際にフィールドワークができるように調査し、アポイントを取る。

最後は研究旅行で学んだことをまとめ、発表会を行う。そしてそれらをまとめた集録を作成する。(第13回～第18回)

以下、一年間の取り組みを記す。(日付の前の数字は総合人間科の授業が何回目を表す)

- ① 4月10日 オリエンテーション、アンケート
- ② 4月17日 ビデオ「はだしのゲン」
GW中 課題「身近な人の戦争体験を聞く」
- ③ 5月15日 課題の発表1 (各クラス)
LT時 研究班編成
- ④ 5月22日 課題の発表2 (学年)
ビデオ「夜と霧」
5月23日 遠足 杉原千畝記念館・リトルワールド
- ⑤ 6月5日 戦争・平和に関するテーマを設定し、グループ調査
6月10日 金沢八重子さんのお話
「私の見聞きした長崎の被爆」
- ⑥ 7月3日 増田先生による講義
「今なぜ広島を学ぶのか」
夏休み フィールドワーク先やテーマに関する個人調査
- ⑦ 9月11日 グループでの調査 指導教官との打ち合わせ

- ⑧ 9月25日 フィールドワーク先の調査 アポ取り完了
- ⑨ 10月2日 依頼状書き フィールドワーク先での行動、質問の確認
- ⑩ 10月9日 事前学習発表会 フィールドワーク先を報告(学年)
- ⑪ 10月23日 研究旅行オリエンテーション
- 11月4日 3・4限 事前指導
- ⑫ 11月6日 広島研究旅行(5～7日)
 - ・原爆資料館平和セレモニー
 - ・被爆体験者の方のお話
 - ・広島フィールドワーク(各班)
 - ・大久野島毒ガス資料館見学、講演会
- 11月10日 LT時 礼状書き 資料整理

- ⑬ 11月20日 発表会の準備
- ⑭ 12月4日 研究旅行のフィールドワーク発表会
- ⑮ 1月15日 集録原稿下書き
- ⑯ 1月29日 集録原稿下書き
- ⑰ 2月19日 集録原稿清書完成
- ⑱ 3月4日 中2への研究旅行報告会 まとめアンケート

Ⅲ. 生徒の取り組みの様子

1. 戦争についての理解を深める学習

(1)身近な人の戦争体験談(聞き取り)

五月の連休の課題として、自分の身近な人にインタビューをしてレポートを提出させた。多くは自分の祖父母に話を聞いたが、どうしても聞く人が見つからなければ、戦争について興味あることを調べるのもよいことにした。身近な人からの体験談を聞くことができず、調べ学習をした生徒が約二割いた。

レポートは一人二分の持ち時間で、クラスごとに全員が発表した。発表することは、①インタビューした人と経歴、②内容、③インタビューを終えた感想に必ず触れ、あとは各自工夫してもらった。様々な年代の方の話を聞くことができたが、戦時中に幼少期を過ごされた方の話が多いようであった。発表会の後に、話の内容の良いと思ったものを投票してもらったのだが、「もの」を提示しながら話した生徒の発表が支持されていた。

〈生徒の感想〉

「自分が聞けなかったら、もう、永久に失われたかもしれない祖父の戦争体験。戦争について語り継ぐことは重要だなと思った。この課題のおかげで、ゲートルの存在を知ることができた。」

(2)ビデオ「はだしのゲン」

図書館にあるマンガ「はだしのゲン」を読む生徒も多い。原爆投下前後の状況を知ることのできるものとして、親しみやすいアニメを選んだ。既に見たことがある生徒

もいたが、皆で一緒に見て、改めて原爆の悲惨さを感じた。

(3)杉原千畝とビデオ「夜と霧」

遠足で、杉原千畝記念館を訪れるので、その事前学習として、杉原千畝について学ぶことにした。A組の担任で社会科の中野先生に、杉原千畝の経歴、彼の生きた時代と国際情勢について話していただいた。その後、ユダヤ人がどんな迫害を受けたかを物語るビデオ「夜と霧」を視聴した。生徒たちは実写のあまりのむごたらしさに何度も目をそむけていた。しかし、これをきっかけに、「真剣に取り組まなければ」と、はらを据えた生徒もいた。

(4)金沢八重子さんから被爆(長崎)体験を聞く

長崎で被爆をされた金沢八重子さんをお招きし、その体験を語っていただいた。被爆の体験を、本人から直接聞くというのは初めての生徒がほとんどだった。体験談は生々しく、原爆の恐怖を実感した。

(5)増田教授の講義「今なぜ広島を学ぶのか」

昨年に引き続き、名古屋大学法学研究科教授の増田知子先生にお願いして、「今なぜ広島を学ぶのか」というテーマで講義をしていただいた。まず、「原爆投下10秒の衝撃」というビデオを見る。これは、核の研究を専門とする科学者たちが、原爆が投下された瞬間からどう被害が広がっていったのかを検証するという内容である。ビデオを見る前に10秒の黙祷をしたのだが、生徒たちはこの短い時間のうちに一つの街が壊滅したと知って、驚いた。そのことをグループ学習のテーマに反映させた班もある。

その後、先生からの質問。「アメリカはなぜ、こんな原子爆弾を広島に落とすのだろうか」。生徒がいくつかの意見を言い、どれも正しいとされた。そして、原爆投下までの国際政治の経緯についていねいに話してくださった。

(6)研究旅行のテーマ設定

これらの取り組みや、詩・文章などの原爆をテーマにした作品を読み、各自のイメージができたところで、研究班を作り、研究旅行のテーマを決めることになった。キーワードは「広島」、「平和」である。それと同時に二ヶ所のフィールドワーク先も決めていかねばならない。調べたいこと、行く先、時間、他の班と重ならないこと。すべての条件をを満たすように考えるのは難しいことだったが、何度も話し合い、広島でのフィールドワークの計画が出来上がった。各班の研究テーマは大きく分けると、「原爆被害」と「復興」になった。

2. 広島研究旅行

(1) 研究旅行およびグループ研究の概要

1) 行程

11月5日(水)

- 宮島散策
- 平和セレモニー
- 平和公園(原爆ドーム・平和資料館見学)
- 広島市内の自由行動(平和公園～ホテル)
- 被爆体験証言者の話を聞く会(広島平和リボンの会 五名)

11月6日(木)

- 広島市内 班別フィールドワーク(午前中)
- 大久野島への移動(広島～忠海)
- キャンプファイヤー 肝試し

11月7日(金)

- 大久野島自由レクリエーション
- 元毒ガス資料館館長講話
- 毒ガス資料館見学

2) 指導教官制による班別フィールドワークの指導 担当(教科)テーマ (テーマのキーワード)

A組

- | | | | |
|----|-------|-----------------------------|--------|
| 1班 | 中野(社) | 広島の復興 | (復興) |
| 2班 | 中野(社) | 第三者から見た広島 | (国際理解) |
| 3班 | 杉本(国) | Don't need weapon for peace | (武器) |
| 4班 | 杉本(国) | 背後に忍び寄る3秒間 | (原爆被害) |
| 5班 | 飯島(体) | 街の復興による芸術の発展 | (復興) |

B組

- | | | | |
|----|-------|-------------|--------|
| 1班 | 山崎(数) | REVIVAR | (復興) |
| 2班 | 山崎(数) | 生命の復興 | (復興) |
| 3班 | 鈴木(英) | 原爆は永遠に | (原爆被害) |
| 4班 | 鈴木(英) | あなたにとって平和とは | (平和) |
| 5班 | 飯島(体) | メッセージfrom原爆 | (原爆被害) |

3) 班別研究テーマと研究の概要

① A組1班 広島の復興

原子爆弾によって何も無い焼け野原になった広島。現在のような都市になるまで、誰によって、どのように復興が進められたのかを知りたいと思い、このテーマを選んだ。

訪問先は、広島市役所と広島球団事務所。

市役所では、広島市の歴史から、原爆の被害、復興計画の五つの柱、などについてお聞きした。広島カープでは今城康子さんにインタビューをし、質問に答えていただいた。そして球団に強い愛着を持った。

② A組2班 第三者から見た原爆

原爆を投下したアメリカ、被爆した日本だけでなく、当事国以外の国の人々は、原爆についてどのような思い

を抱いているのか。それを知り、個人個人の「平和観」がどのようなのか見極めたいと考えた。

訪問先は広島市留学生会館。その後、平和記念公園で道行く人にインタビューをした。研究旅行の前に、広島大学留学生センターの方に協力していただき、アンケートを行った。

アメリカ、イギリス、ミャンマー、イラン、カザフスタン、タイ、中国、これらの国の人々から意見をもらい、国が違えば考え方がまったく違うことに驚いた。そして、お互いに少しずつ妥協して、それぞれの意見を尊重、尊敬することが平和につながるのだということがわかった。

③ A組3班 Don't need weapon for peace

「平和のために武器はいらない」そう考え、大量殺人を可能にする武器についてもっと知りたいと思った。

訪問先は、海上自衛隊第一術科学校。

施設を案内してもらい、戦前の海軍と自衛隊の違いなどの質問に答えていただいた。生徒は生活に関することに興味を持っており、海軍の生活信条や、食べ物、娯楽などについても細かく尋ねていた。

④ A組4班 背後に忍び寄る3秒間

「背後」、ハイゴとは、8時15分。原爆が投下された時間である。「3秒間」とは、原爆が落とされてから広島の街が壊滅するのにかかった時間である。たったの3秒間で広島を何も無い土地に変えてしまった原爆が人間に、身体的に、精神的に与えた影響を調べることにした。

訪問先は放射線影響研究所と広島原爆障害対策協議会。

放射線影響研究所はB組3班と共に訪問。レクチャーの後、質疑応答をした。広島原爆障害対策協議会では富岡啓子さんにインタビューをした。富岡さんの本音のお話、生徒たちは胸を熱くしていた。

⑤ A組5班 街の復興による芸術の発展

原爆そのものの悲惨より、その後の発展に目を向けた。街の復興について調べるのでは、他の班と同じになると迷っていたところ、指導教官から「町の復興以外にも、芸術とか、復興の種類はいろいろあるよ」とアドバイスを受け、芸術を中心に、復興をとらえることにした。

訪問先は、広島市役所と幟町教会。

広島市役所はA組1班と共に訪問した。インタビューしたのは、古池さん、福馬さん。全国から様々な人たちが、広島市の復興などについて話を聞きに来ており、本校の生徒たちにもスライドやパンフレットを用意して丁寧に説明して下さった。幟町教会では、エルネスト・ゴセンス氏(エリザベド音楽大学の創立者)について、音楽による町の復興について、インタビューをした。

教会のパイプオルガンの響きが胸に残り、芸術が人に与える影響の大きさを実感した。

⑥ B組1班 ^{リバイバル}REVIVAR～戦後の広島～

原爆の被害に遭った広島が、その後どう復興していったのかを知りたくて、このテーマを選んだ。

訪問先は、広島平和記念資料館と中央通り商店組合。

事前に、戦時中の生活（衣・食・住）について調べ、広島中央通り商店組合でインタビューをした。組合の方々は親切に対応してくださり、町が復興していく様子がよくわかったようだった。

⑦ B組2班 生命の復興

原爆が投下されたとき、広島にはもう植物は生えてこないといわれた。それなのに、なぜ芽が出てきたのか…。植物と救護所についての今日までの歩みを調べてみることにした。

訪問先は、饒津（にぎつ）神社と広島平和記念資料館。

夏休みには、被爆植物について調べた。饒津神社では、原爆の被害を受けた手水鉢、松などについて説明を聞いた。生徒は宮司の浅野さんの、原爆の被害を後世に伝えようという熱意に心を動かされた。その後、平和記念公園内の被爆アオギリを訪ねた。

⑧ B組3班 原爆は永遠に… ～体の傷と心の傷～

原爆の後遺症を知ることで、原爆の恐ろしさに迫ろうとした。後遺症に苦しむ人々を理解し、このことを次の世代に伝えてゆきたいと考えた。

訪問先は、放射線影響研究所。午後は原爆被害者の会の久保浦寛人さんに宿舎においていただき、インタビューをした。

放射線影響研究所はA組4班と共に訪問した。(④参照)3班は事前に久保浦さんを通じて、被爆体験継承の会の方々にアンケートを依頼していた。午後は、その結果と共に久保浦さんからお話を聞き、被爆した方々の心に深く触れることができた。

⑨ B組4班 あなたにとって平和とはLOVE&PEACE

原爆だけにとらわれず、今を見たい。貧しくても幸せそうな顔をした人。平和といわれる日本でさえも自殺者は増えていく。本当の平和とは何なのか、考えてみたいと思い、このテーマを選んだ。

訪問先は幟町中学。事前にアンケートを送り、実施してもらい、その回答を取りに行った。その後中国新聞広島支社へ。

幟町中学校の平和への積極的な取り組み（平和委員会があり、慰霊祭などに参加している）に驚いている。アンケート結果からは、同世代の、広島の中学生の生の声を聞くことができた。中国新聞社では、田代明さんに

お話を聞き、戦争の不条理にやりきれない思いを抱いた。

⑩ B組5班 メッセージfrom原爆

広島に落とされた原爆により、被害を受けた人や物からのメッセージを受け取り、原爆を知らない人や、未来の社会を担う人たちにそのことを知ってもらい、いろいろなことに役立ててもらいたいと考えた。

訪問先は、本川小学校と広島県原爆被害者団体協議会。

本川小学校では田中さんに、校舎の中を詳しく案内していただき、説明を聞いた。広島平和会館では、広島県原爆被害者団体協議会の事務局長である坪井直さんにインタビューをした。生徒の質問にわかりやすく答えてくださった。

(2)フィールドワーク発表会

一班につき、十五分ずつ時間を当て、各クラスで発表会をした。映像を使ったり、物を提示したり、クイズ形式にしたり、各班工夫して発表した。

〈生徒のコメントより〉

- ・紙芝居形式や、資料の使い方が良かった。
- ・もっと感想を言ってほしかった。
- ・資料の書き方がよかった。
- ・もっとみんなの方を見て話してほしかった。
- ・班員が協力しあっていた。

IV. 一年間の取り組みについてのアンケート結果

1. 一番印象に残った活動

生徒がこの一年間のカリキュラムの中で、最も印象に残っている活動は何だろうか。A組(39名)にアンケートし、結果をまとめた。

〈結果〉

	項目	人数
旅行前	身近な人に戦争体験を聞く(GW課題)	1
	グループでの事前調査	3
	千羽鶴を初めて折ったこと(平和セレモニー用)	1
旅行中	フィールドワーク	24
	被爆体験証言者の方のお話	4
	広島 の 街 そのもの 旅行 そのもの	2 1
旅行後	研究旅行の発表会	1
	集録原稿書き	1
	一年間、平和について考え続けたこと	1

予想通り、広島研究旅行が印象に残った生徒が最も多かった。中でも、グループ別に活動したフィールドワークが突出していた。フィールドワークの何が、心に残ったのだろうか。

生徒の作文から三つの要素に分けてみた。一つは「広島という場所」である。その土地や施設、展示したのから受けた強い印象、また、人からじかに話を聞いたり、

多くの人（特に大人）と本気で会話ができた手応えが大きかったようだ。（お忙しい中、丁寧に対応して下さった方々に感謝いたします。）二つ目は「考えの変容」である。フィールドワークで交わされた会話の中から自分の考えに大きな転換をもたらすような考え方に触れることができたという生徒があった。三つ目は「グループ活動」である。グループの中で自分が役割を果たしたり、自分一人ではできないと思うようなことが、グループ活動で可能になった喜び、班員の個性に触れた感激などが記されていた。

数は少なかったが、印象に残ったことに、「初めて平和への願いをこめて千羽鶴を折った」ことや、「集録原稿をまとめるのに苦心した」ことを挙げる生徒もあった。

2. 意識の変化

昨年度の中学3年生が行ったアンケートと同じものを、今年度の中学3年生の年度始め（4月）と年度末（3月）に行った。今年度の中学3年生の意識が、年度当初と年度末ではどう変わったか、昨年度の中学3年生と比較してどんなことが言えるか、考えてみたい。各項目の一行目は今年度中学3年生の年度始めの結果、二行目は今年度中学3年生の年度末の結果、三行目は昨年度中学3年生の年度末の結果である。回答は四段階で答えてもらった。数字は%である。

〈結果〉

項目	非常に	割合	あまり	全く
①自分の身近で戦争体験を持つ人から話を聞く機会がある	32	19	35	14
	20	26	36	18
	23	40	29	8
②自分の身近で戦争体験を持つ人から話を聞きたいと思う	27	46	19	8
	12	34	54	0
	12	66	21	1
③家庭で世界情勢や世界平和について話し合ったことがある	16	41	38	5
	18	26	46	10
	11	41	35	13
④友達と世界情勢や世界平和について話し合ったことがある	5	32	38	25
	5	36	49	10
	5	35	42	18
⑤国際理解や世界平和を促進するため、行動を起こした	0	11	30	59
	3	3	50	44
	5	12	59	24
⑥国際理解や世界平和を促進するため、行動を起こしたい	19	62	14	5
	10	44	46	0
	12	66	21	1

項目ごとに考察してみたい。

①「自分の身近で戦争体験を持つ人から話を聞く機会がある」では、今年度の中学3年生は、年間通して大きな変化は見られない。昨年度の中学3年生の方が、やや身近に戦争体験を語ってくださる方（多くは祖父母）が多かったようである。

②「自分の身近で戦争体験を持つ人から話を聞きたいと思う」、これについて今年度の中学3年生で特筆すべきは、年度末には「まったく思わない」者がいなくなったことである。戦争の話題に耳を傾ける姿勢ができたということであろうか。平和学習に取り組む時には、一人でも話を聞けない者がいると、雰囲気は台無しになる。その点では、全員が前向きに取り組む姿勢があり、その中で学習を続けてこられたのは生徒にとって良いことであった。

③「家庭で世界情勢や世界平和について話し合ったことがある」、今年度の中学3年生は、年度末には、家庭で世界情勢や世界平和について話す機会は減っている。戦争の話題は家庭では話題になりにくいものである。広島研究旅行の前の方が、家庭で戦争について話す機会が多かったのであろう。

④「友達と世界情勢や世界平和について話し合ったことがある」、では、年間を通し、変化はなかった。昨年度の中学3年生ともあまりちがわない。

⑤「国際理解や世界平和を促進するために、自分から行動を起こしたことがある」では、「非常に」が年度末に3%に増えている。しかし、その具体的な内容はどうかと、「広島の被害について調べ、発表した」というのだ。これなら学年全員がしていることである。この結果から考えると、授業以外での国際理解や世界平和のための行動は、ほとんど起こしていないといえるのではない。学べば学ぶほど、自分が行動することを見出すことが難しいと思うのかもしれない。

⑥「国際理解や世界平和を促進するために、自分から行動を起こしたい」、では、多くの生徒が年度始めより一段階上の意欲を持つようになった。「まったくない」という生徒がおらず、機会があれば、行動を起こしたいと思っている。また、昨年度の中学3年生の方が行動への意欲はより高いようである。

これらの結果から、今年度の中学3年生の、戦争に関する学習が進むにつれ、それをもとにして考えるようになった姿が浮かんでくる。戦争の実相や被害の知識を得ることや、戦争を体験された方の話を聞き、思いを共にすることは、理解する喜びもあるだろうが、辛さや苦しみを伴うものでもある。年間を通じた意欲の増減の変化には、こういった辛さや苦しさが反映されているのではないだろうか。それでも、この一年の学習により、戦争の実相に耳を傾け、自分に引きつけて考える姿勢はできたといえるだろう。

V. まとめ ～生徒の作文より～

最後の授業で、「あなたにとって平和とは」という題で、生徒に今考えていることを書いてもらった。その作文を引用しながら、一年間の活動を振り返ってみたい。

中学3年生で、「国際理解と平和」というテーマでの

学習を進めてきたが、内容は「平和（や、表裏一体である戦争、戦争被害）」を主としたものだった。戦後58年、この国で実際に起こった戦争の傷跡に触れて、何かを感じてほしかった。「身近な人の戦争体験を聞く」という課題では、戦争体験を持つ人を探せない人が二割いた。これからその割合はますます増えるだろう。広島で被爆体験された方から直接お話をうかがうこともできにくくなる。そんな時の流れの中で、直接戦争を体験された方のお話は、生徒を大きくゆさぶってくれた。

◎僕は小さい頃から戦争に興味があったので、祖父母によく話を聞いた。戦争についてのテレビを見たり、本を読むのも好きだった。けれど、すべて実物ではなかった。だから、実際に広島に行って原爆ドームを見たり、貞子の像を見たり、原爆資料館を見学した時、とても衝撃を受けた。

◎（フィールドワークや発表で）「平和」という言葉が心に響くのではなく、「悲しみ」の方が断然大きかった。

◎広島に実際に行って心(肌)で感じたことを忘れずに、これからもずっと平和について考えていきたいと思えます。

フィールドワークで自分の日頃の生活とは接点のない世界に触れた生徒は、そこで感じたことを、このように説明している。

◎（海上自衛隊第一術科学校を訪れて）話を聞いているうちに、やはり普通の人とは少し価値観などが違うのだということがわかってきた。この国を守るという強い意志が伝わってきたような気がした。

◎（留学生との交流を通して）世界中が同じ平和を望んでいるわけじゃないんだなって。一口に「平和」っていったって、たった一つじゃないんだ。だから「平和」って難しいなって思ったんです。世界中が平和になるには、皆が協力していかなくちゃいけない。一つの意見を押しつけたりせず、お互いを尊重して認め合うことが大切なんだと思います。

「感じる」ことは、「知る」という行為につながっていく。「知る」ことの重要性をこう書いた生徒がいる。

◎私はこの学習を通して、「平和」について考えるために、なくてはならないものに気がしました。それは「知る」ということ。つまり、過去に起きたたくさんの過ちを、正しく理解するということです。本や資料を読むだけでなく、実際に体験された方のお話を聞く。それまで

見えてこなかった、過ちの本当の姿が見えてくると思えます。様々な考え方、見方に触れ、どれが正しいとは決して言えないけれど、人々が望む「平和」が少しずつわかってくる。

また、この生徒は、広島研究旅行で、被爆体験証言者の方から聞いた次のような話を書いている。戦跡に対する感性も学んでいくもので、「知る」ということがなければ、戦跡に対する接し方もぞんざいになるであろう。

◎（被爆体験証言者の方のお話）「平和記念公園の火は、原爆がなくなったら消そう、という人々の祈りがこめられているのです。でも、広島に遊びに来た孫に『あの火、きれいだね』と言われ、とてもショックでした。」というお話です。知らない、ということはとても恐ろしいことだと思います。そして、「知る」ことの大切さを改めて感じました。

さて、一年間、平和についての学習を続け、平和について考え続けた結果、生徒たちがたどりついた結果は、争いの原因は一人一人の心の中にある、というものだった。ほとんどの生徒が、日常生活の中で、人の心のあり方を変えることが戦争の抑止につながると考えている。

◎心は平和を考え、つくっていく上で重要だと思う。(中略) まず、身近なことに目を向け相手を敬い、思いやる気持ちを持つこと。そしてその目を世界に向け、自分のできる限りの努力をする。最終的に「平和」を自分なりに語り、様々な人に語る事ができれば、一人の人間として立派になれると思う。個人個人から始まり、これが全世界に広がれば、これが本当の平和になる。

◎私は、人々が互いに思いやりを持って生活し、それぞれが身近な「平和」を守ることができれば、本当の意味の「平和」が見つかるのではないかと思います。

◎お互いが一歩ゆずれば・・・。損得を考えなければ、平和なんてすぐ実現します。それができない所が人の弱さであり、ズルさだと思います。

◎他人のことを考えるなんて、簡単そうで、難しいことだ。けれど、優先席に座らないだとか、ポイ捨てをしなないだとか、歩きたばこをやめるだとか、今すぐに始められる「思いやり」はたくさんある。まずはそれを、自分で実行してみることが大切だと思う。

多くの生徒は、広島についての学習をしながら、戦時中の日本と現在の日本とを較べていた。そして、現在自

分たちの生活を当然だとし、あたりまえの生活ができる状態は平和だとしている。一方で、「戦争のない状態が平和」だとは言い切れないとも言う。

◎今私たちがしている当たり前のことのできる普通の生活をするのが私にとっての平和です。

◎私が思う所の平和は、みんなに少しずつだけでも、幸せと秩序を。みんなが至上の平和を得るのではなく、少しの幸せが本当に幸せに思えるような、そんな世界が平和と言えるのではないかと思う。

◎この一年いろいろなことを経験して「平和というのは人間一人一人の心の中にあるものではないかな」という結論に結びつきました。心が平和でない人が事件を起こしてしまい、他の何人もの人の心を平和でなくしてしまうのではないか。そう考えると日本は戦争をしていない、という意味では平和かもしれないけど、本当の意味での平和な国ではないと思います。

◎日本は戦争をしていない。しかし毎日のように放火、殺人、誘拐、暴行などの凶悪事件が起きている。果たして本当にこんなので平和か、と思う。そこで考えてみた。なぜそんなことが起きるのかと。簡単に言うと、自分に自信が持てず、自分を社会のゴミだと思っただけだ。だから何しても良いという感じになっている。しかし、考えてみると本当に社会のゴミのような人間はいるのだろうか。

学習を通して、「命」、「生きる」という根本に思い至った生徒もいた。

◎私が出した結論は、「(平和とは) 人の命が守られる世界」だった。これを研究集録にも書いたのだが、補足するなら「人の命」だけでなく、動物や植物、すべての命が守られる世界といたい。

◎戦争のない世界も平和の一つだが、僕が考えるのは今自分が生きていることだと思う。

◎人が人として人並みに扱われ、生活していけることこそ僕の思う理想像であって、また平和につながっていく道だと思う。とにかく世界の人々は人の命の尊さを知り、一人一人がかけがえのない存在であること、それをわかってほしい。

問題を大きくとらえたまま、焦点を絞りきることができずに、そのままにしてある生徒もあった。こういった問題には結論は出ず、何らかの結論を出したところで正

解だと断言はできないものだし、自分で考えたとはいえ、どこかで聞いたことのある意見と同じだったりする。だが、この時期に、自分で感じ、考えることが大切なのだ。このように考えている生徒に、今後どういう方向を示せばいいのか、「国際理解と平和Ⅱ」(高2)に引き継がれる課題である。

◎友達同士の争い、国の上の人たちの争い、この国はこのままでいいのかと思うことがある。別に僕が動かせる訳でもない、誰かが切り出す訳でもない。いつ戦争が起こるかもわからない。そんなんでビクビクしているのはいやだ。(中略) 結果、笑うというのが一番だ。

◎たとえ、人が人を殺さなくなっても、人を殺す原因が新たにでてきたら、人類はすぐさまそれに対抗できる何かを造り出し、それを巡って争いを起こすのです。つまり人類がこの地球上に存在する限り平和は訪れません。

◎(イラク) 戦争は終戦したようだけど、情勢は悪化し、メディアでは毎日、人の死亡を伝えているが、私はあまり耳を傾けなくなりました。

問題の解決を各人の心に置いた生徒が多かった中で、外に働きかけることを述べた生徒もいた。

◎自分が平和だと今感じている私が、平和だと感じることでできない人に平和を伝える。これは平和の中で育ってきた私の義務、責任である。(註・この生徒は音楽活動によってこのことを達成したいと考えている)

◎地球の一つぐらい壊滅させることができる、そんな恐ろしい核兵器がこの世に何個もあるのに、平和だと言ってもいいのだろうか、と思う。(中略) だから「本当の平和」は、全世界から核兵器が消えないと来ないと思う。

最後に、長くなるが、ある生徒の作文のほぼ全文を引用する。

◎一ヶ月前、僕は今年度の総合人間科に疑問を抱いていた。なぜ、こんなことをしなくてはならないのか。そんなことばかり考えていた。なぜか？理由ははっきりしている。学習内容の幅が狭すぎるのだ。昨年度、一昨年度はもっと色々フィールドワーク先を選び、自分がやりたいと思ったことができた。それなのに今年は「国際理解と平和」なのにもかかわらず、「平和」に偏りすぎていた。フィールドワーク先が広島？そんなの、テーマが「戦争」と「原爆」に集中するに決まっているじゃないか、狭すぎる！そして、少しでもこのテーマから外れようとやっきになった。そしてせめて「原爆」から離れよ

うと、「復興」というテーマで進めていった。(このテーマ設定だけは今でも間違っていなかったと思っている)最後の研究集録を書く時にも、「人間誰もが平和について考えるなんて無理なんだから、やりたい人がやればいい」などと考えていた。

しばらくして、研究集録が届いた。普段なら見もしないものだったが、どういう風の吹きまわしか、読んでみる気になった。パラパラと適当に、班のページをめくっていく。ふと、ある人の個人研究に目がとまった。何が書かれていたか?特筆すべきことは書かれていなかった、と思う。しかし、なんとというか、今年度の総人(註・総合人間科)に対する構えのようなものが自分と全く違うことになくせんとした。その人が、おそらく真剣に書いているであろう姿が思い浮かび、自分が恥ずかしくなった。その時になってやっと気が付いた。「そうだ、誰もが考えることなどできないからこそ、考えることのできる自分が考えなきゃいけないんだ」と。なぜこんな簡単な事に今まで気が付かなかったのかろう、とかなり後悔した。

今年度の学習について、このように考えていた生徒がいて不思議はないと思うが、学習の途中では、担当者はそのことに気がつかなかった。幸い、最後の作文でそのことがわかり、本人も他の生徒の文章を読むことで自分の学習姿勢を振り返り、新たな気付きを得た。が、この作文に書かれていることは学習の過程で担当者は気を付けていなければならないことだった。

一つは、「テーマ」について。この学年のメインの活動が広島研究旅行ということもあり、中心が「平和」に置かれ、「国際理解」まで盛り込む余裕がなかった。テーマの狭さに始めから息苦しさを覚えた生徒もいたことだろう。しかし、「広島」「原爆」は、誰もが知るべき問題だと考える。だからそれを扱うのは当然としても、少なくとも、現在、日本の社会が直面している国際関係の問題を取り上げ、調べ学習をしたり、話し合いをする機会を持つべきであった。この問題は、社会科の授業との連携や、教科担当者からのアドバイスが必要になろう。

もう一つは「学習の構え」ということである。容れる態勢ができていないところに注ぎ込んだとしても、苦しいばかりで、与える側、受ける側、ともに徒労でしかないだろう。したがって、学習者に「構え」があるかを常に気遣う必要がある。それが無い場合、どうやって「学習への構え」を作るか。状況に応じて工夫をこらすべきであろう。

平和学習で何を学ばせ、どんな成果を求めるのか。行動がどう変われば、学習の成果といえるのか。アンケート結果では、「国際理解や世界平和のための」行動をした生徒はほとんどいないということだった。しかし、この一年間の経験から学んだことは、社会に出て行動する

ときの判断の材料となってくれるだろう。自分を中心に考えるのではなく、周囲の、特に弱者の視点を忘れないでいることが必要だ。この学習を高校二年生での「国際理解と平和Ⅱ」で、より深めてくれることを願っている。